

物語の力

— 『アーサー王ここに眠る』における「虚構」と「真実」 —

The Power of Story

— Fiction and Truth in *Here Lies Arthur* —

新居明子

Akiko Nii

はじめに

フィリップ・リーヴ (Philip Reeve, 1966-) の『アーサー王ここに眠る』 (*Here Lies Arthur*, 2007) は、「ブルターニュもの」 (“Matter of Britain”) ¹ と呼ばれるアーサー王伝説を題材とした作品である。ところが、ここには騎士道の華である円卓の騎士やマーリンの魔法といった、従来のアーサー王ロマンスにおける基本的モチーフは一切登場しない。本作品では、それらはすべて吟遊詩人ミルディンが作り出す「物語」、² あるいは「虚構」として描かれているのである。彼の巧みな話術によって、粗野な野心家であるアーサーは理想の英雄に、商人から手に入れた剣は、湖の妖精によって授けられた異世界の名剣へと姿を変える。また、この「虚構」と「真実」の関係は、アーサー王伝説に関わる逸話にとどまらず、主人公グウィナの男装や戦士たちの大言壮語など、登場人物の日常のなかにも散在しており、読者はミルディンの紡ぎ出す物語が「真実」として受け入れられる様を目の当たりにしながら、人間の営みが「虚構」と「真実」の複雑な関係のうえに成り立っていることを理解する。

本論では、まず作品の背景としてアーサー王伝説の成立過程や吟遊詩人の役割について概略した後、『アーサー王ここに眠る』において「虚構」が「真

実」として受け入れられていく過程を、具体的なエピソードをもとに検討し、さらに「物語にはどのような力があるのか」「人間にとって物語とは何か」という、本作品に一貫して流れる主題についての考察を試みる。

1 アーサー王伝説について

アーサー王伝説はヨーロッパの中世から現代にいたるまで、文学だけでなく絵画や彫刻、音楽、オペラ、映画など、様々な分野に影響を与えてきた古典的題材である。³ 歴史上の真実が伝説や虚構となって語り継がれるという流れは、『アーサー王ここに眠る』の内容とも大きく関係しているため、まずはアーサー王伝説の成立過程について論じてみたい。

1.1 アーサー王の歴史的事実性

伝説の王のモデルとなっているアーサーについては、実在したという確たる証拠はない。しかしながら、特にイギリスでは17、18世紀頃まで、アレキサンダー大王やカール大帝同様に、アーサー王も史実に基づく英雄王として広く信じられていた。その後、合理主義的思考が発展するにつれてその実在性に疑いが生じ、19世紀にはアーサー王は民間伝承や伝説上の架空の人物にすぎないとして、歴史書の類から完全に排除されるに至る。ところが、20世紀に入ってから、伝説の王のモデルとなるべき人物が5世紀から6世紀にかけて存在したという説が浮上し、現在では、その歴史的事実性を証明することは未だ困難であり、かつ伝説の大半は架空の物語であるとしつつも、実在した人物を伝説の原型とする考えが主流となっているようである。⁴

1.2 アーサー王伝説の成立

アーサー王の原型と目されているのは、5世紀後半から6世紀にかけてブリトン人を率いて活躍したと考えられるローマン・ケルトの指導者、または隊長である。当時のブリテン島は、西ローマ帝国の衰退に伴いローマ軍が撤退した後、入れ替わるようにしてサクソン人の侵略に脅かされていた。この時期、約40年という短期間ではあるものの、サクソン人との戦いで敵を撃

退し、ブリテン島に束の間の平和をもたらしたとされる一人の人物が、やがて英雄王として伝説化したと考えられる。サクソン人の侵略を防いだこの戦いは「バイドン山の戦い」(“The Battle of Badon”)と呼ばれ、ウェールズ人の僧侶ギルダス(Gildas)の『ブリテンの滅亡と征服について』(*De Excidio Britanniae*, c.540)に、最古の記述として記録されている。⁵ただし、ギルダスはこの戦いにおける指導者の名前については何も言及していない。⁶

アーサーの名前は、9世紀ネンニウス(Nennius)の『ブリトン人の歴史』(*Historia Brittonum*)と、ウェールズの歴史をまとめた『カンブリア年代記』(*Annales Cambriae*, c.960-80)という二つの歴史書に登場する。ネンニウスは、「バイドン山の戦い」の勝利がアーサーによってもたらされたとし、アーサーは王ではなく、“but he[Arthur] was their leader in battle”(下線筆者)(35)と述べている。⁷その他、成立年代には異論があるものの、ウェールズの詩『ゴドジン』(*The Gododdin*, c.600)や11世紀ウェールズ語の散文説話集『マビノギオン』(*Mabinogi*)にも、アーサー王にまつわる逸話が数多く含まれている。また11世紀から12世紀にかけて書かれた『聖カドック伝』(*Vita Sancti Cadoci*)や『イステッド伝』(*Vita Sancti Illuti*)をはじめとするいくつかの聖人伝においても、アーサーの名前が度々言及されている。⁸

アーサー王に関しては、これらの書き言葉による記録の他に、ケルトの口承詩、つまり話し言葉による伝統も考慮する必要がある。アーサー王を中心とする「ブリターニュもの」やその他ケルトの伝承や物語の大半が、当時バードと呼ばれる語り部、つまり吟遊詩人たちによって口頭で伝えられていたと考えられる。バードに関しては後ほど詳しく取り上げる。

様々な記録やケルトの口承詩をもとに、アーサー王の生涯をまとめあげたのが、12世紀ジェフリ・オブ・モンマス(Geoffrey of Monmouth)の『ブリテン列王史』(*Historia Regum Britanniae*, c.1136)である。モンマスはアーサーの物語を伝承や伝説ではなく史実として語ったため、『ブリテン列王史』は正当な歴史書としての地位を獲得し、その後何百年もの間アーサーの歴史的事実性が信じられることとなった。ラテン語で書かれたモンマスの『ブリトン列王史』は、ウェアス(Wace)によって『ブリュ物語』(*Le Roman de Brut*,

1155)としてフランス語に翻訳され、それをさらにラヤモン (Layamon) は『ブルート』 (*Brut*, c.1189-1199) に英訳した。

ラテン語から世俗の言語に翻訳されたアーサー王物語は流布の速度を上げ、12世紀後半フランス宮廷に仕えたクレチアン・ド・トロア (Chrétien de Troyes) は、フランスに伝わっていた物語をもとに、宮廷風恋愛や騎士道、聖杯伝説のモチーフとアーサー王を結びつけ、アーサー王伝説を一大ロマンスとして開花させた。アーサー王と円卓の騎士たちの物語は、フランスのトゥルバドール、ドイツのミンネジガーといった吟遊詩人を通じ、さらに広くヨーロッパ中に広がり、やがて大陸からイギリスに帰郷することとなる。そして15世紀、トマス・マロリー (Thomas Malory) によって、アーサー王物語の集大成ともいべき『アーサー王の死』 (*Le Morte Darthur*, c.1470) が世に送りだされることとなった。この作品こそが、現代にいたるまで多くの文学作品をはじめ様々な分野に繰り返し登場する、アーサー王物語の源といっても過言ではない。

このように、アーサー王伝説の成立過程を概観すると、「5、6世紀に活躍した隊長」という、歴史上の「真実」とおぼしきものを小さな核としながら、吟遊詩人によって口承のみで伝わっていた物語にモンマスら歴史家たちが織り込んだ脚色部分、つまり「虚構」が盛り込まれ、いつしか壮大な英雄伝説が形作られていったことがわかる。

2 吟遊詩人について

次に、アーサー王伝説成立にも大きな影響を及ぼし、また『アーサー王ここに眠る』においても重要な役目を担う吟遊詩人について、簡単にまとめてみたい。

どこかロマンを感じさせる響きの「吟遊詩人」とは、そもそもどのような職業の人達のことであろうか。吟遊詩人は、「中世ヨーロッパの抒情詩人の一派で、各地を旅行し、自作の詩を吟誦・朗読した者」(『広辞苑』776)と定義付けられており、主に南フランスの「トゥルバドール」、北フランスの「トルヴェール」、ドイツの「ミンネゼンガー」など、⁹ 中世ヨーロッパで活

躍した詩人や芸人を指す翻訳語として使用されることが多いようである。しかし歌謡という口承形態で物語を後世に伝える吟遊詩人は、古今東西存在していた。ホメロスに代表される古代ギリシャ時代の「ラプソドズ」「アオイドス」等の叙事詩人や、古代ケルトの「バード」、北欧の『エッダ』や『サーガ』の担い手であった「スカルド」、日本の「琵琶法師」やユーカラの語り部、また中国、イスラム、アフリカ、インドなどにも、吟遊詩人に類する存在があった（福田 10-14、上尾 216-29）。

これら多種多様な吟遊詩人たちの中で、『アーサー王ここに眠る』に登場するのは、ケルトの吟遊詩人「バード」(“bard”)である。古代ローマ時代の学者ストラボン (Strabon) によれば、バードとは、古代ケルト社会において「神々への賛歌や叙事詩をうた[う]」(飯尾 341) 役目を担っていた人々を指す。¹⁰ 文字の文化を持たなかった古代ケルト人は、民話や伝説をドルイド教の神官やバードの記憶にのみ残し、バードはそれらを語り継ぎ、歌い継ぎながら口伝で後世に伝承した。英雄アーサーの物語も、文字に記録される以前から、バードによってブリテン島のみならず大陸にも口承で流布していたと考えられている。

またストラボンは、ケルト人の民族的気質を「ことごとく狂気じみているほどの戦闘好きで勇敢」「誰でも闘争心が強く」(飯尾 339, 344) と描写している。バードには、勇猛で気性の荒いケルト人の宴において、英雄の武勲や栄誉を感動的な詩として吟じ、それによって戦士たちの戦意をさらに高揚させる役目があったと考えられる。

バードの詩は文字化されていなかったがゆえに、朗誦のたびごとに、英雄はより英雄的に、戦いはより勇ましく、聞き手の期待や反応に合わせて内容が少しずつ自由に変化していった可能性は大いにあるだろう。¹¹ 古代ケルトのバードたちは創造力を駆使しながら、一介の隊長であったアーサーを、やがてヨーロッパ全土を支配下におく偉大な皇帝にまで引き上げたのである (Jackson 11)。

3 『アーサー王ここに眠る』における「虚構」と「真実」

アーサー王伝説は、歴史上の「真実」にバードや歴史家の「虚構」を盛り込みながら形作られていった。本論が扱う『アーサー王ここに眠る』は、「真実」と物語を語ることによって生じる「虚構」の問題に着目した作品である。

作品の舞台は、アーサーが実在したと考えられている5世紀のブリテン島である。孤児の少女グウィナは、戦火を逃れる際にアーサーに仕える吟遊詩人のミルディンに拾われる。そしてやむなくミルディンの野望の片棒を担いだために、グウィンという偽名で男装し、ミルディンの従者としてアーサーの軍に加わることになる。ミルディンの野望とは、彼が紡ぎ出す物語の力で、彼が最強の男と見込んだ小集団の族長であるアーサーを、サクソン人を相手に立ち上がる偉大な王に仕立て上げ、ブリテン島に平和を取り戻すことであった。

3.1 アーサー王伝説にかかわる「虚構」と「真実」

ミルディンの巧みな話術が作り出す英雄アーサーと彼の物語は、本作品にみられるたくさんの「虚構」のなかでも最大のものである。そこで、まずアーサーに関わる「虚構」と「真実」を、具体的に検討してみたい。

高名なアーサー王について、作品の冒頭部分でグウィナが以下のように読者に語りかけている：

You've heard of him. Everyone's heard of Arthur. Artorius Magnus; the Bear; the *Dux Bellorum*; the King that Was and Will Be. But you haven't heard the truth. Not till now. I knew him, see. Saw him, smelled him, heard him talk. When I was a boy, I rode with Arthur's band all up and down the world, and I was there at the roots and beginnings of all the stories. (下線筆者) (4)

“the King that Was and Will Be”¹² というミルディンが語る「虚構」のなかのアーサーは、“... someone out of stories. He fought giants and rescued maidens and outfoxed the Devil” (16)、“... spent his time hunting magical stags and fighting giants

and brigands” (62) として描かれ、巨人や悪魔と戦い、魔法の鹿を狩り、乙女たちを救う “the wisest and fairest and best king they had ever heard of” (332) という理想的な英雄王である。

偉大な支配者としてのアーサーの名声は野火のように広がるが、アーサーの「真実」の姿は英雄とはほど遠いものである。アーサーの正体を看破したメールワース王は、アーサーを以下のように述べている：“Arthur fights for anything but Arthur. More robber than soldier, I’ve heard. A wild, roving man, like Uthr before him. A looter of churches. A cattle thief.” (144) 現実のアーサーは、土地を荒らし略奪を繰り返す、野党集団のリーダーにしかすぎないのである。

粗野な暴君を英雄に仕立てるためにミルディンが作り出す物語のなかに、アーサー生誕にまつわる逸話がある。アーサー王伝説のモチーフのひとつとして一般に知られているのは、ティンタジェル侯の妻であるイグレイン（本作品ではイガーナ）に恋をしたアーサーの父ウーサーが、マーリンの魔法でティンタジェル侯に姿を変え、想いを遂げるというものである。戦死したティンタジェル侯にかわってイグレインと結婚し、後に生まれた子供がアーサーである。本作品においても、この逸話は周知のことであり、ミルディンが魔法を使ってウーサーを別人の姿に変えたことになっている。しかし、ミルディンはグウィナに、“I have no magic powers” (27) と明言し、この逸話については “it’s all nonsense” (27) であり、“It never happened” (27) と打ち明ける。「真実」は、ウーサーが砦を攻め、イガーナを戦利品もろとも奪い取り、生まれたのがアーサーというだけのことであった。魔法云々は、アーサーの偉大さや権威を高めるための「虚構」というわけである。

アーサー王の名剣エクスカリバー（本作品ではカリバーン）でさえ、ここではミルディンの巧みな弁舌によって作り出される「虚構」と化してしまう。エクスカリバーは、アーサー王伝説において最も知名度の高いキーアイテムである。¹³ 本作品においてミルディンが考案したこの名剣の役割は、ケルトの神々がアーサー支持を表明する証として授けた別世界の剣というものである。真偽を尋ねるグウィナにミルディンは、“I [Myrddin] bought it from a trader down at Din Tagyll. But we can make men think it is from the gods” (23) と真実を

明かす。そして彼の策略は功を奏し、皆は一介の商人から購入した剣を神々からの賜り物として信じるのである。

さらにミルディンは、“a good trick” (37) と自画自賛する計略に、グウィナを巻き込むことを思いつく。アーサー王伝説では、エクスカリバーは湖の乙女よりアーサーに授けられたものとなっている。本作品では、アーサーにカリバーンを授けたのは湖の乙女ではなく、実はグウィナであった。偶然拾った少女が泳ぎ達者だと知ったミルディンの指示に従い、密かに水に潜ったグウィナは、湖の妖精として衆人が見守るなか水面下から剣を差し出し、アーサーはそれを異世界の剣として受け取る。アーサー自身を含めた皆が、ミルディンが考案した「虚構」を「真実」として信じ、ミルディンは“the greatest enchanter of the island of Britain” (43) として、以前にも増して畏怖と称賛の対象となる。

また「バドン山の戦い」(本作品では「バドンの戦い」)においても、「虚構」と「真実」の例を見ることができる。この戦いは、アーサーという歴史上の人物と伝説のアーサー王を結びつける、記念碑的出来事として位置づけられている。先述のように、アーサーに関する最古の記述であるネンニウスの『ブリトン人の歴史』では、アーサーをこのサクソン人との戦いにおける勝利の最大の功労者と記録している (Nennius 35)。本作品においても、「バドンの戦い」はアーサーの名声が広まる大きな転機である (118)。しかし、実際のところ作品ではこの戦いは、百人にも満たない小集団との小競り合い程度のものであり、アーサーは賊徒化したサクソン人の一団を制圧したに過ぎなかった。それにもかかわらず、ミルディンの目論み通り、かつてアンブロジウスが同じ地において大勝利した戦いと混同され、アーサーの名声をさらに輝かせる逸話となって広がっていくのである。

本作品におけるアーサー王伝説にかかわる「虚構」と「真実」の最後の例は、アーサー王の帰還伝説¹⁴ にまつわるものである。これはミルディンが作り出したものではなく、その従者であり弟子であったグウィナが、ミルディンやアーサー亡き後に吟遊詩人となって物語るものである。グウィナは、アーサーが戦場で倒れ息を引き取る瞬間に立ち会っていたため、アーサーの最期

の「真実」を知っている。しかし、ミルディンの物語を脚色しさらに新しい逸話を創作しながら、人々が聞きたいと望むアーサーの物語を、ミルディンに代わって歌い継ぐのである。“Will Arthur return?” (332) と尋ねる聴衆のひとりに、グウィナは以下のように答える：

A ship came for Arthur as he lay on the field of Camlann. Away downriver it took him, to the sea. And on an island in the west he lies sleeping, healed of all his wounds. And he'll wake one day, when our need of him is bad enough, and he'll come back to us. (332)

ローマ人やサクソン人に抑圧されたブリトン人の心の拠り所となったであろう、「いつの日かアーサー王は自分たちを救いに再来する」という帰還伝説のモチーフも、本作品では聞き手の希望に合わせてグウィナが創作したささやかな「虚構」なのである。

3.2 登場人物にかかわる「虚構」と「真実」

『アーサー王ここに眠る』では、アーサー王伝説にかかわるもの以外にも、登場人物たちの日常に潜む「つくりごと」や「嘘」といった様々な「虚構」が描かれている。

主人公グウィナのジェンダーに関わる「虚構」は、アーサー王伝説とは全く関係のない作者リーブの創作である。作品中グウィナは男女のジェンダーの間を頻繁に行き来する。当時9歳か10歳ぐらいであったグウィナは、湖の乙女という大役を務めた後、アーサーらに湖の乙女の正体を知られないために、ミルディンの計略で少年グウィンとして彼の従者となり、アーサー軍に加わることになる。グウィナは自己防衛のためにやむを得ず自分のジェンダーを偽り、男装するのである。しかし、やがて成長とともに「真実」のジェンダーを隠すことが難しくなり、再びミルディンが作り出した物語によってグウィナに戻り、アーサーの妻グウェニファアの侍女となる。

ところが作品の後半部分を細かく検討すると、グウィナはグウェニファア

の侍女として女に戻った後も、繰り返し男女のジェンダーの間を行ったり来たりしていることがわかる。グウィナとは反対に、男であるにもかかわらず女として育てられたペレドゥル¹⁵を守るため、グウィナは再びグウィンとして男装し、アーサーの軍隊に加わる。そして戦いで深手を負ったペレドゥルの心を癒すため、湖の乙女に姿を変え、その直後にまたグウィンに戻る。そして病床のミルディンの看病をするために一旦グウィナとしてドレスを着るが、ミルディンの死後、再びペレドゥルを助けるために男装する。作品の結末部で、グウィナはペレドゥルに自分の正体を告げ、二人は吟遊詩人とその連れとして共に旅立つのである。

作品前半では自己防衛のために半ば強制的に男装させられたり女の姿に戻されたりしていたグウィナだが、作品後半では自らの意志で自在にジェンダーを選択していることがわかる。グウィナが男装しグウィンとなることは「虚構」の姿を身にまとうことだが、実際のところはグウィナにとって男女のジェンダーの境界は、かなり曖昧なようである。グウィンとして他の少年たちと共にアーサーに仕える生活を送るうちに、“Even I was coming to think of myself as a boy” (52) と、「虚構」であるはずの男というジェンダーを「真実」として受け入れるようになっていく。また“You’ve been a good daughter to me. And a good son, too” (313) というミルディンの言葉や、“Gwyn and Gwyna, we’re one and the same” (329) というグウィナ自身の言葉には、男女のジェンダーを超えた、グウィナとグウィンの同一性という真の「真実」が示唆されているとさえ考えられる。つまり、グウィナにとってはグウィナもグウィンも結局は同一人物であり、ジェンダーに関わらずどちらも「真実」なのである。¹⁶

『アーサー王ここに眠る』には、グウィナのジェンダーの問題以外にも、登場人物たちにかかわる「虚構」と「真実」の例が多く描かれている。例えば、ミルディンの正体は旅をしながら物語を歌い聞かせる吟遊詩人である。しかし彼の紡ぎ出す物語の力と豊かな知恵で、畏怖すべき魔術師としてアーサーの傍に仕えている。彼の首からは“horse charms, moon charms, paw of a hare” (12) 等の魔除けが、そして家の入口にも“the fence of charms and skulls and

knotted strings” (168) といった魔法の品々がぶらさがっているが、それらはすべて本人曰く “They’re just for show. Simple people see them, and think I’m closer to the gods than other men” (56) という「真実」を隠すための「虚構」である。同様に、聖ポロックは清貧の教えを説く聖者の仮面をかぶった強欲な詐欺師であり、作品の最後にグウィナと共に旅立つペレドゥルは、先述のように男であるにも関わらず女として育てられる。

登場人物の正体だけでなく、彼らの日常的な嘘の数々にも、「虚構」と「真実」の構図を見出すことができる。内陸地方の田舎出身であるグウィナは、海の向こうの町から来たと自分の出生地を偽る。嘘をついたあと、グウィナは “if I would be struck dumb or dead or mad for telling such appalling lies” (45) と不安に思うが、戦いに出遅れて何の戦果も挙げるができなかったメドロートが、弟には敵を1ダースも殺したと大言壮語する様子を目の当たりにし、“I wasn’t the only person who had been spinning tales about himself” (46) と安心する。その他、男装したグウィンからグウィナに戻る際、ミルディンはドラゴンから身を守るため男装していたという話をでっち上げる。美しいセレモンをサクソン人から守ったのはグウィナであったが、彼女は手柄をペレドゥルのものとし、ペレドゥル自身を含めて皆がそれを信じる。グウェニファーと侍女たちが男女間の愛に対して抱く幻想もまた、一種の「虚構」である。男として男たちと共に暮らした経験のあるグウィナには、宮廷風恋愛に登場する、愛する人のために尽くす気高い騎士などは「虚構」にしかすぎないという現実をよく理解していた。このように、本作品では英雄王の伝説といったスケールの大きな問題だけでなく、人間のささやかな営みもまた、多くの「虚構」と「真実」のうえに成り立っていることが示唆されている。

また「虚構」と「真実」の関係で重要な点として、小さな「真実」から「虚構」が形作られるだけでなく、「嘘から出た誠」、「嘘を信ずれば真実となる」等の格言が示すように、今度はその「虚構」が「真実」となる、あるいは「真実」として信じられるという、双方向的なプロセスもまた同時に存在するということが挙げられる。グウィナは “even I started to believe that it was true” (195)、“The old lie came so natural to me now it felt like truth” (269) と自分の嘘を

半ば信じる。またベドウィルとグウェニファーの悲惨な末路をその目でしかと見たにもかかわらず、事実を歪曲して物語った後、グウィナは“After that, I could never quite believe I'd seen them both dead. It seemed so much more likely that they were safe together in the Summer Country” (264) と、自分が創作した物語の方が真実のように感じる。このように、本作品における「虚構」と「真実」というモチーフは、アーサー王伝説が、史実に基づく「真実」という小さな種から発生し、「虚構」によって次第に大きく膨らみ伝説化する一方で、それが何百年の間歴史上の事実として認識されていたことにも通ずるのである。

4 物語の力

最後に、「物語にはどのような力があるのか」「人間にとって物語とは何か」という、本作品の根底に一貫して流れる主題についての考察を試みる。

ミルディンが語るアーサーの「物語」は、本作品では“story”と“tale”という二つの単語をほぼ同義で用いて表現されている。人々が物語を好むことについて、ミルディンはグウィナに繰り返し伝える：

“Everyone loves a story,” he always said. And whatever Arthur did, Myrddin could turn it into a story so simple and clean that everyone would want to hear it, and hold it in their hearts, and take it out from time to time to polish it and see it shine, and pass it on to their friends and children. ... “If the tales are good enough, even the poor man who goes hungry from paying Arthur taxes will love him. I am the story-spinning physician who keeps his reputation in good health.”

(下線筆者) (61)

ミルディンはさらに、“men see whatever you tell them to see” (35)、“People see what they expect to see, and believe what you tell them to believe” (49) という、信じるように言われたことだけを信じるという人間の性質を利用しながら、アーサーの物語を語り彼の名声を広める。そしてグウィナはミルディンの物

語によって、「虚構」の世界に生きる物語のアーサーと真実のアーサーが、聴衆の中で同一人物化していく様子に触れながら、“in the end stories are *all that matter*” (204) であると、物語の持つ強い影響力を実感する。

しかしながら、グウィナは作品の終盤でミルディンの野望が潰えていく様子を目の当たりにし、物語の力の限界を悟る。ミルディンがどれほど懸命にアーサーの物語を紡ぎ出し、そしてその努力によってどれだけ英雄アーサーの名声が流布しようとも、肝心のアーサー自身はミルディンの期待を裏切り、略奪を好む領主以上には決してなることができない。アーサーをブリテン島の希望だと繰り返すミルディンに向かって、グウィナは苦い現実を突きつける：

“You’ve wasted your life building him high and wrapping him up in stories, but Arthur hasn’t cleaned the Saxons away. ... Arthur doesn’t care about anything but making his own self fat and rich, ... And all you can do is make up stories, make up lies, try and turn him into something that he isn’t. And your stories won’t last any longer than Arthur does.” (305-06)

グウィナは師であるミルディンに、虚構で塗り固められた物語は「真実」を超えることはなく、いずれは消えてしまうはかないものであるという物語の力の限界を告げるのである。

ミルディンの死後、アーサーはあえなく戦死する。それではミルディンが心血を注いで希望を託したアーサーの物語は、グウィナの言葉にあるような「真実」を欺くその場限りの「虚構」にしかすぎず、やがては消え去る無意味なものなのだろうか。この問いに答える鍵となるのは、作品終盤に挿入されているペレドゥルと湖の妖精の逸話である。最後にグウィナの連れとなるペレドゥルは、身を守るために女であると思ひ込まされて育った生い立ちをもつ。ある日アーサーの騎士たちに出会ったことがきっかけで自分の本当の性別を知り、騎士にあこがれ、ついにはアーサー軍に加わる。しかし、騎士たちの華々しい武勲が描かれる物語の中で生きてきたペレドゥルは、初めての

戦いで現実に直面し、体の怪我のみならず心にも大きな傷を負ってしまう：
“It was the shock, I[Gwyn] think, as much as the wound itself. ... He'd expected war to be the way it was in stories.” (282-83)

ミルディンの徒労に物語の力の限界を悟ったグウィナが、衰弱するペレドゥルを救うためにとる手段は、物語の力を借りることであった。グウィナは湖の妖精に姿を変え、異世界の杯から癒しの水を差し出し、ペレドゥルに生きる気力を取り戻させることに成功する。「真実」は、グウィナが泉のそばに落ちていたありきたりの木製の杯で川の水を飲ませただけであるが、プラセボ効果同様に、グウィナが作り出したこの「虚構」の物語は、ペレドゥルに希望という大きな心理的效果をもたらし、精神的な回復を促す。“It made me better, Gwyn. I feel strong again!” (292) と叫ぶペレドゥルの様子に、グウィナは物語が内包する可能性に気付くのである。

“When he[Arthur] dies, the stories will die with him” (306) と、一旦は物語の限界に失望したグウィナであったが、物語の可能性に触れ、最後にはミルディン亡き後を継ぐ吟遊詩人として、彼の豎琴を手にもつてアーサーの物語を歌い継ぐ道を選ぶ。アーサーを知るグウィナが物語るのは、しかし「真実」のアーサーではなく、人々が聞きたいと望む “the wisest and fairest and best king they had ever heard of” (332) という理想的な英雄王アーサーである。グウィナは聴衆の希望に応えるかのように、アーサーがいつの日か蘇るという逸話を付け加える。それがたとえ「虚構」にすぎないとしても、物語はペレドゥルの回復を促したように、“a light in the dark” (315) として、人々に心の支えや希望を与え続ける力を持ち得ることを知ったからである。

おわりに

本論では、まずアーサー王伝説の成り立ちとして、一介の戦闘隊長であったアーサーという小さな歴史上の「真実」に、吟遊詩人バードの口承詩をはじめ様々な「虚構」が混じり合い、いつしか壮大な伝説が形作られた過程を概略した。そして、『アーサー王ここに眠る』において、「虚構」が「真実」として受け入れられていく過程を、ミルディンが物語るアーサー像やグウィ

ナのジェンダーの問題等の具体的なエピソードを挙げて検討した。そして最後に、物語の持つ力とその限界、さらにその限界を超えて物語が内包する可能性についての考察を試みた。

「虚構」として語られる物語には、「真実」のアーサー自身を変える力はない。そもそも「つくりごと」や「嘘」といった「虚構」は、本作品でも多く描かれているように、日常のあらゆる場面に当たり前に散在している。しかし同時にまた物語は、時として「事実的な真偽のレベルを越えた大きな真実」（磯谷 15）として人々の心を癒し、希望を抱かせ、生きる糧となり得る。歴史上の小さな「真実」からアーサー王伝説が成立したように、本作品においても、ミルディンが語る物語のアーサーは消えることなく、人々が希望を託す比類なき英雄として後世にまで残るのである。

アーサー王を扱った児童文学作品を、マーリンの魔法等を題材とするファンタジー的要素の強い作品と、史実に基づくリアリズムにのっとった歴史小説の二つに分けるとすれば、¹⁷『アーサー王ここに眠る』は後者に分類されるであろう。しかしながら、作者であるリーヴ自身はあとがきの冒頭で、“*Here Lies Arthur is not a historical novel, and in writing it I did not set out to portray ‘the real King Arthur,’ only to add my own little thimbleful to the sea of stories which surrounds him*” (335) と述べている。つまり、作者の意図するところは、史実を明らかにすることではなく、膨大な物語群として存在するアーサー王の世界に、作者なりの脚色を「少しだけ付け足す」ことにあった。古代ケルトのバードたちが、英雄アーサーの武勲詩を朗誦するたびに、少しずつ新たな「虚構」を加え、やがて一人の隊長が理想的英雄王として伝説化していったように、リーヴもまた21世紀の作家として、彼の物語を少し付け加えることで、現代のわれわれ読者に新しいアーサーの世界を示しているのである。

本作品は、新しいアーサー王物語を提供したことで児童文学作品として高く評価され、出版翌年の2008年にイギリスのカーネギー賞を受賞している。この評価は、アーサー王伝説の成り立ちそのものにもかかわる、歴史と伝説、虚構と真実、そしてさらに物語作家としての究極の問題である「物語の力」というテーマに、正面から取り組んだことへの評価とも言えるだろう。

(本論は、2016年度日本イギリス児童文学会第46回研究大会における口頭発表の内容に加筆修正したものである。)

註

- 1 「ブルターニュもの」(“Matter of Britain”)は、アーサー王を中心とする伝説や歴史を含めた話材の呼称である。12世紀フランスの詩人ジャン・ボデル (Jean Bodel) が、中世文学における物語を、カール大帝にまつわる「フランスもの」(“Matter of France”)、古代ギリシャやローマの神話的テーマを扱う「ローマもの」(“Matter of Rome”)、そして「ブルターニュもの」に分類し、やがてそれらは中世ヨーロッパにおける三大物語群として定着した (Ward & Waller 279)。
- 2 本論では、「物語」を物語論や構造主義的観点から論ずるのではなく、*OED*の“story”の定義にある“A narrative of real or, more usually, fictitious events, designed for the entertainment of the hearer or reader; a series of traditional or imaginary incidents forming the matter of such a narrative; tale” (*OED* “story” 5.a) という、「*現実上のまたは虚構の事柄についての語り*」の意味に限定して用いている。
- 3 アーサー王は、文学作品はもとより、文学以外でも例を挙げれば枚挙に暇がないほど多様な分野の題材として、繰り返し用いられてきた。19世紀ワーグナーのオペラやラファエル前派による絵画をはじめ、現代日本のアニメやゲーム、漫画等のサブカルチャーにも広く浸透している。また2016年に宝塚によるフレンチ・ミュージカル『アーサー王伝説』宝塚歌劇公式ホームページ〈<http://kageki.hankyu.co.jp/revue/2016/arthur/>〉アーサー王伝説に関する多様な分野の資料については、『アーサー王伝説万華鏡』の巻末にリスト化されている (高宮 233-41)。
- 4 アーサーの歴史的事実性をめぐる議論については、青山が序文に簡潔にまとめている (vi-vii)。“[I]t should not be allowed to remove him[Arthur] from the sphere of history” (Stenton 3) のように、史実性をより確かなものとする意見がある一方で、“At this stage of the enquiry, one can only say that there may well have been an historical Arthur” (Charles-Edwards 29)、“I personally am not prepared to say whether Arthur was a real figure or not” (Salway 485) というように明言を避ける歴史家もあり、アーサーの実在性については未だ議論の余地を多く残している。
- 5 ギルダス以降マロリーに至るまでのアーサー王伝説の成立過程については、青山、バーバーをはじめとする多くの歴史家が概説している。また、『ブリテンの滅亡と征服について』『ブリトン人の歴史』『カンブリア年代記』『ゴドジン』『マビノギオン』について本論に記載した推定制作年は、すべて *The New Arthurian Encyclopedia* による (Lacy 195, 342, 8, 203, 289)。
- 6 ギルダスが自身の著作において個人名を出すことは非常にまれであったことが指摘されている (Lloyd 125; Stenton 3-4)。
- 7 アーサーに関するネンニウスの記述は以下のとおりである：“Then Arthur fought against them in those days, together with the kings of the British; but he was their leader in battle. ...

- The twelfth battle was on Badon Hill and in it nine hundred and sixty men fell in one day, from a single charge of Arthur's" (Nennius 35)。
- 8 中世ウェールズの年代記や伝承については、森野が詳細にまとめている (33-80)。
 - 9 上尾はトゥルバドール26名とミネゼンガー41名を、吟遊詩人の歴史的背景とともに詳しく紹介している (70-212)。
 - 10 文字の文化を持たなかった古代ケルト人に関しては、ストラボンをはじめとする古代ギリシャ・ローマ人が残した資料を基に研究が進められている。Cunliffeは古代ケルト社会におけるバードの役割について、“composing eulogies and keeping alive the oral traditions of society through public storytelling” (92-93) と述べている。
 - 11 ケルトのバードだけでなく、民族の英雄を称える叙事詩を朗誦した古代ギリシャ・ローマ時代の吟遊詩人にも、同様の即興的特徴がみられる(藤縄 45)。また、聞き手の反応に合わせて語る内容が変化するという双方向的現象は、吟遊詩人に限らず、音声化を伴う「語り」全般に共通する特徴であると考えられる。例えば子どもへの読み聞かせも、読み手は聞き手である子どもたちの反応を無視して読み進めることはできない(しかた 19)。
 - 12 “the King that Was and Will Be” (4) は、マロリーの『アーサー王の死』で言及されているアーサー王のラテン語の墓碑銘、“HIC JACET ARTHURUS, REX QUONDAM REXQUE FUTURUS” (Vinaver 717) を指していると考えられる。
 - 13 「エクスカリバー」は、アーサー王伝説初期の段階から登場するアーサー王が持つ魔法の剣であり、ブリテン島の正当な統治者の象徴である石に刺さった剣と同一視されることもある (Lacy 147-48)。映画『エクスカリバー』(Excalibur, 1981) やミュージカル『エクスカリバー: 美しき騎士たち』(宝塚歌劇団、1998) のタイトルだけでなく、中世をイメージしたホテルの名前 (Excalibur Hotel Casino) やゲームにおける強力な武器の名前としても頻繁に使用されている。
 - 14 アーサー王の帰還伝説は、アーサー王伝説の代表的なモチーフのひとつである。モンマスの『ブリテン列王史』以前より、サクソン人の侵略に苦しむブリトン人の間で、アーサーの不死や帰還について口伝えで語られていたという記述が残されている (Padel 11)。モンマスはこれらの伝承に、戦いで負傷したアーサーがアヴァロン島へ運ばれたという逸話を付け加え、人々の帰還待望論を強めたと考えられる。
 - 15 ペレドゥル (Peredur) はウェールズ伝承の英雄の名前であり、後のアーサー王物語群で聖杯探索に従事する円卓の騎士パーシヴァルの原型と考えられている (Lacy 356, 357-58)。
 - 16 「男装のヒロイン」というモチーフの意義やあり方について考察することは、本論の論点から外れるため、ここではグウィナのジェンダーを作品中の「虚構」の例として取り上げるのみにとどめる。しかしながら「男装のヒロイン」は、シェークスピアをはじめとする様々な文学作品において多用されてきた大変興味深いモチーフであるため、グウィナのジェンダーを超えた自我の問題も含め、今後の検討課題としたい。
 - 17 白井は、アーサー王伝説を扱った児童文学作品を、「ファンタジー」と「リアリズム」に加えて「伝説の再話」の3つに分類している (55)。また、アーサー王を扱った児童文学作品の数は、漫画等のサブカルチャーを除外してもなお膨大であり、Curryは“over one hundred and thirty” (158) という数を挙げている。その他、Sullivan, Whitaker, Montgomery

等がアーサー王伝説を扱った様々な児童文学作品について、多角的な分析を加えている。

引用文献

- Charles-Edwards, Thomas. "The Arthur of History." *The Arthur of the Welsh: The Arthurian Legend in Medieval Welsh Literature*. Eds. Rachel Bromwich, A. O. H. Jarman and B. F. Roberts. Cardiff: University of Wales Press, 1991. 15–32.
- Cunliffe, Barry. *Druids: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Curry, Jane L. "Children's Reading and the Arthurian Tales." *King Arthur through the Ages*. Eds. V. M. Lagorio and M. L. Day. Vol. 2. New York: Garland, 1990. 149–64.
- Jackson, K. H. "The Arthur of History." *Arthurian Literature in the Middle Ages: A Collaborative History*. Ed. R. S. Loomis. Oxford: Clarendon Press, 1961. 1–11.
- Lacy, Norris J., ed. *The New Arthurian Encyclopedia*. New York: Garland, 1996.
- Lloyd, J. E. *A History of Wales*. 3rd ed. Vol. 1. London: Longmans, 1939.
- Montgomery, Catherine J. "The Dialectical Approach of Writers of Children's Arthurian Retellings." *Arthurian Interpretations* 3 (1988): 79–88.
- Nennius. *British History and the Welsh Annals*. Ed. and trans. John Morris. Totowa: Rowman and Littlefield, 1980.
- Padel, O. J. "The Nature of Arthur." *Cambrian Medieval Celtic Studies* 27 (1994): 1–31.
- Reeve, Philip. *Here Lies Arthur*. New York: Scholastic, 2010.
- Salway, Peter. *Roman Britain*. New York: Oxford University Press, 1981.
- Stenton, F. M. *Anglo-Saxon England*. 3rd ed. New York: Oxford University Press, 1971.
- "Story." Def. 5a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Sullivan, Edward T. "Arthurian Literature for Young People." *Book Links* 8 (1999): 29–33.
- Vinaver, Eugène, ed. and intro. *Malory Works*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- Ward, A. W. and A. R. Waller, eds. *The Cambridge History of English Literature*. Vol. 1. Cambridge: Cambridge University Press, 2016.
- Whitaker, Muriel. "Swords at Sunset and Bag-Puddings: Arthur in Modern Fiction." *Children's Literature in Education: An International Quarterly* 8 (1977): 143–53.
- 青山吉信『アーサー王伝説：歴史とロマンスの交錯』東京：岩波書店，1985。
- 磯谷孝「物語におけるヴィジョンと記憶：『一大同時空』の意識と思想について」『語り：文化のナラトロジー（記号学研究 6）』日本記号学会編 '86，東京：東海大学出版会，1989。13-43。
- 上尾信也『吟遊詩人』東京：新紀元社，2006。
- 加藤恭子『アーサー王伝説紀行：神秘の城を求めて』東京：中央公論社，1992。
- 『広辞苑』第6版，新村出編，東京：岩波書店，2008。
- しかたしん『文学と演劇の間：語りの世界が拓くもの』愛知：愛知書房，1998。
- 白井澄子「児童文学とアーサー王伝説」『立教女学院短期大学 紀要』25（1993）：53-66。
- ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』第1巻，飯尾都人訳，東京：竜溪書舎，1994。
- 高宮利之『アーサー王伝説万華鏡』東京：中央公論社，1995。

- バーバー, リチャード『アーサー王:その歴史と伝説』高宮利之訳, 東京:東京書籍, 1983.
- 福田政義『吟遊詩人:比較文化史的視点から(学術研究業書3)』坂戸:城西大学女子短期大学部, 1987.
- 藤縄謙三『ホメロスの世界』東京:魁星出版, 2006.
- 森野聡子「ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ」『アーサー王物語研究:源流から現代まで(研究業書62)』中央大学人文科学研究所編, 東京:中央大学出版部, 2016. 33-80.